

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

## \* 語学が見せてくれた新しい世界 \*

中道 凜

私は昨年12月に行われた第29回イタリア語スピーチコンテストに出場し、「語学が見せてくれた新しい世界 - Le lingue allargano il tuo mondo -」というタイトルでスピーチを行い、二位を受賞することができました。

私がこのテーマでスピーチをしようと思ったのは、語学学習を通じて人生が変わり、世界が広がったと感じられたからです。

私は現在高校二年生ですが、中学三年生の時に公益財団法人 AFS の留学プログラムに申し込んでイタリアへ留学しました。その頃はなんとなく「留学してみたい」という思いはあったものの、日頃の生活からの「逃げ」の気持ちで選んだ部分も若干ありました。

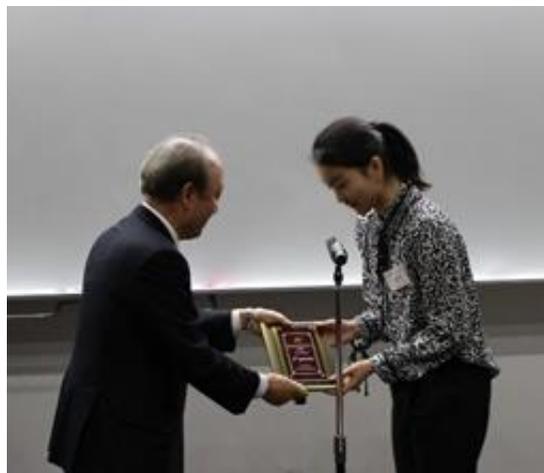
行きたい国は選考試験の時に第十希望まで書くことができますのですが、第一、第二希望にはカナダ、アメリカといった英語圏を入れて、第三希望に入れていたのがイタリアでした。

それまでイタリアには二回ほど家族旅行で訪れていた程度で、ご飯がおいしかったというのと、明るい国というイメージしかなく、留学先がイタリアに決まった次の日には周りから、「なんでイタリアにしたん？」とたくさん聞かれましたが、自分自身わからないので明確に答えられずにいました。

また、留学そのものが、一年間親元を離れて見知らぬ土地で違う家族と一緒に暮らす、という経験であることだけはわかっていたので、「こんな中

途半端な気持ちで決めてしまっただけに良かったのかな」と不安な思いもありました。

イタリア語を勉強し始めたのも、ちょうどこのころです。きっと母は、私のこの留学に対する中途半端な気持ちを見抜いていたのだと思います。イタリアに行くことが決まってから一週間もたたないうちに半強制的にイタリア会館の無料体験レッスンに連れていかれました。現在まで約三年間お世話になっているマリアローザ先生とはこの時にはじめて出会いました。



【コンテストの授賞式にて】

先生にどうしてイタリア語を勉強するのか聞かれ、母がそれまでの経緯を話すと、先生はニコニコしながら「楽しみですね！」と言われたのがとて

も印象的でした。

それから出発までの一年間、イタリア会館に通ってイタリア語の勉強をしました。とは言っても、中学入学からフェンシング部に所属し、忙しい日々を送っています。部活は土日活動するため、休みは木曜日しかありませんでした。しかし、木曜日は八歳の時からずっと続けているバイオリンのレッスンがあるため、イタリア語のレッスンは火曜日に部活が終わった後に入れていました。正直、部活の後に二時間も続くレッスンはしんどくて、レッスン中に眠たくなることもしばしばでした。

日本語にはない名詞の性、動詞の活用、接続法など、当時の私にはすべて難しく思え、「もうイヤ！！」と思ったことも何回かありました。言語なんて現地で覚えればいい、と思っていた私は、イヤイヤながらなんとか一年間のイタリア語レッスンを終え、イタリアへ出発しました。

しかし、私の「言語は現地で学べばいい」という考えが大間違いだと気づいたのは、留学してすぐのことでした。私はロンバルディア州のミラノに派遣されたのですが、このミラノ支部は世界の20か国から約20名の留学生が在籍している、イタリア国内でも比較的大きな支部でした。主にヨーロッパやアジアからの留学生が多かったのですが、日本人は私一人だけでした。

基本的にアジア圏からの学生はヨーロッパの言語を習得するのが比較的遅い、と思われている印象がありました。留学生の中で、留学前にイタリア語の勉強してきたのは私ともう一人、ポーランドからの留学生だけで、現地のボランティアの方々から「アジアから来たのにそんなに話せるなんて！」と驚かれました。

私は一年間イタリア会館で勉強したおかげで他の学生よりも言語習得の面で困ることは少なく、現地の方からもたくさんかわいがってもらいました。この時ようやく、留学前に無理やりイタリア会館に連れて行ってくれた母と、目の前で眠たそうにしているも根気強く指導してくださったマリアローザ先生に感謝しました。Rai2という現地のニュース番組では留学生代表としてインタビューを受けたりと、他の人にはなかなかできないような経験もさせてもらいました。

また、イタリア語を学んだことで、現地のイタリ

ア人だけでなく、同じくイタリアに留学している世界各地からの留学生と友達になりました。その時、自分が、「友達」と呼べる人たちが世界中に増えたことを実感しました。

世界中の友人たちと一緒にいる中で彼らから学ぶことはとても多く、言語を学ぶということはこういうことか、と自分の中ではっきりと理解しました。一つの言語を学ぶことで自分の世界も広げられると気づいてからは、もっと広げていきたい！と思うようになり、フランス語の勉強も始めました。



【スピーチ自体はあまり緊張しませんでした】

これらの経験から、私は今回のスピーチコンテストに参加するにあたって、テーマを「語学が見せてくれた新しい世界」とすることにしました。自分がイタリア語を学んだことで体験できた様々な経験と、またそれによって自分をより磨こうと思えたきっかけを多くの人に伝えたい、と思ったからです。

出場を決めてからの原稿作成は本当に大変でした。そもそも、どこからどう書いていいかわからず、所定の4分から5分に収めようと思うと、案外原稿は長めに作らなければならない、何度も何度も先生にチェックしてもらいました。先生からのアドバイスで、難しい単語ばかりを並べるのではなく、伝わりやすさを考え、文章は簡潔にしました。

そして原稿がいざ出来上がると、次は発表の練習です。ここで私は先生からのアドバイスに従って、「E poi...」や、「Eh però...」のように、日本語で言う、「えーっと」に当たる表現を何度も加えました。すると、より自然な感じで発表できるようになりました。また、一年間現地でずっとイタリア語を

使っていたとはいえ、ネイティブ並みに話せるわけではないので、おかしなイントネーションも多々あったりして、先生にはそれらもすべて直してもらいました。

特に、今回のコンテストでは「いかに聞き手に興味を持ってもらえる話し方ができるか」という点にこだわったので、原稿を覚える際に、「暗記しよう」ではなく、「何度もストーリーを読もう」という気持ちで練習しました。実際に、同じ絵本を何度も何度も繰り返し読むと、ストーリーとともにそのうち文章も覚えていくのと同じように、暗記しないことが相手に伝えるうえで重要だと考えたからです。やはり、いくら暗唱が必要とはいえ、スピーチコンテストで私が「語学の重要性」について語ろうと思ったのは、私が言語の勉強を始めて得た経験を誰かに「伝えたい」と思ったからで、それならそれなりの工夫が必要だと気づかされたからです。

つらつらと自分の思ったこと、考えたことを述べるより、「いや、それでね…」とか、「まあ実際はね…」などのフレーズを加えて、表情もうまく使いつつ、一呼吸おきつつ話したほうが誰だって「面白い！」と思ってもらえるはずなのです。

逆に考えてみて、仮に原稿の文法が完璧で、それをしっかり暗記できていたとして、機械的な読み方であれば、聞いていて「すごい」とは思えけれど、「ずっと聞いていたい」とは思わないような気がします。この場合、話す方も、もしも本番で予想以上に緊張して原稿を忘れてしまったら、その先を続けるのが難しいと思います。実際、私も本番になって、原稿のある箇所がすっぽ抜けてしまって、練習の時はすらすら出てきていたのになんだったかな、と少々焦ったのですが、「いや、そもそもね、」とアドリブで入れてみると、忘れかけていた箇所が出てきて、結果的に上手く続けることができました。

また、発表後にはイタリア人の先生からの質疑の時間が設けられているため、そのための練習もしてもらいました。どのような質問がされるのか不安だったので、先生とどんな質問をされるか予想して、前もって質疑応答の練習もしたりしました。しかし、実際は他の出場者の方に対しても、私に対しても、スピーチの内容で述べたことをもう少し

詳しく聞かれたり、イタリア滞在中の思い出を聞かれたりすることがほとんどでした。私は「ホストファミリーはどんな構成でどんな感じだったか」、「留学期間中に大変だと感じた出来事は何だったか」、「なぜイタリアに行くことを決めたのか」などを聞かれました。あまり気負いすぎる必要はないかと思いますが、答えるときのコツは、Si か No の二択で答えるだけでなく、そのあとにもう少し詳しい説明を続けることです。そうすることで審査員や来場者の方々がうなずいてくれたので、気分が軽くなりました。



【授賞式後の記念撮影(前列右から5人目が筆者)】

今回、このコンテストに参加してみても学ぶことも多く、二位を受賞できたことは自信になりました。3月末にはコンテストの副賞でイタリアに2週間行く予定です。久しぶりにミラノの友人やホストファミリーに会えるのを楽しみにしています。

最後に、このスピーチコンテストに参加するにあたって支えてくれた家族、そしてマリアローザ先生に心から感謝したいです。

本当にありがとうございました。

(当館語学受講生)

## カルヴィーノとアーティチョーク 34

堤 康徳

おとぎ話的な空想力にあふれるカルヴィーノの初期の作品群に比べ、『レ・コスミコミケ』以降の作品には、どこかつつきにくさを感じる読者も少なからずいるかもしれない。正直に言えば、私もそのひとりである。詩人・批評家のジョヴァンニ・ラボニーは、『レ・コスミコミケ』以降のカルヴィーノの作品について、知性や明晰さ、あるいは冷徹さの優位性を批評の世界が強調しすぎているのではないかと指摘している。そのうえでラボニーは、言葉の合理性、ピタゴラス的抽象性、構造的な戯れなどの特徴がたしかに認められるにしても、同時に、「ユーモア、唯物論、快活さ、狼狽、妄想、憐み……」といった要素も併存すると述べている(Giovanni Raboni, Postfazione a Italo Calvino, *Se una notte d'inverno un viaggiatore*, Milano, Mondari, 1994, p. 261)のだが、はたしてどうだろうか。

1979年にエйнаウディ社から発表された『冬の夜にひとりの旅人が』をとりあげてみよう。この作品は、読者を主人公とする二人称小説とまず定義できる。二人称小説であれば、ミシェル・ブートルの『心変わり』(Michel Butor, *La modification*, 1957)や、この小説に着想を得た倉橋由美子の『暗い旅』(1961年)などの先例がある。だがカルヴィーノの小説において「あなた」と呼びかけられるのは、まさにカルヴィーノの新刊『冬の夜にひとりの旅人が』を手にとった読者なのである。第一章の書き出しを読んでみよう。

あなたはイタロ・カルヴィーノの新しい小説『冬の夜にひとりの旅人が』を読み始めようとしている。さあ、くつろいで。精神を集中して。余計な考えはすっかり遠ざけて。そしてあなたのまわりの世界がおぼろげにぼやけるにまかせなさい。ドアは閉めておいたほうがよい。向こう

の部屋ではいつもテレビがつけっぱなしだから(脇功訳、松籟社、1981年、p. 1)。



この作品は、おのずと物語論や読者論が盛り込まれたメタフィクションとしての様相を帯び、小説の各ジャンルをパロディ化したかのような十の異なる物語(なかには、タカクミ・イコカなる日本人作家の官能小説もある)は、語り出されてから佳境に入る前に中断してしまう。『冬の夜』を一読して、煙に巻かれたような読後感をもつ読者がいてもふしぎではない。じつは、私もまたそのひとりである。ここはぜひ、作者自身に作品について語ってもらうことにしよう。カルヴィーノは、世界各地で行った講演において、比較的簡潔な言葉で、いわば胸襟を開いて自作を解説してくれることがある。1984年、ブエノスアイレスのブックフェアに際して行われた講演の報告テキスト(*Il libro, i libri*)で、カルヴィーノは次のように述べている。

偽小説(romanzi apocrifi)、つまりそれは、私ではない作者、実在しないひとりの作者によって書かれた小説という意味ですが、それをなんとか書きあげようという企てを、自作の『冬の夜にひとりの旅人が』において私は徹底的に追及しました。この作品は小説を読む楽しみについての小説です。主人公は読者です。彼は十回にわたり、その都度異なる本を読み始めますが、自らの意思の及ばないできごとによって、そのどれをも読み終えることができません。したがって私は、いずれも私とはどこか異なり、それぞれがお互いに異なっている架空の作者

の十篇の小説の出だしを書くことになりました。疑念と混乱した感覚に貫かれた小説、具体的で活発な感覚に貫かれた小説、内省的で象徴的な小説、革命的で実存的な小説、冷笑的で野蛮な小説、偏執狂的な小説、論理的で幾何学的な小説、エロティックで退廃的な小説、地球的で原始的な小説、黙示的で寓意的な小説。私の狙いは、十冊の小説それぞれの作者と私自身を重ね合わせることに、読者と自らを重ね合わせることに、真のテキストというよりもむしろひとつのジャンルを読む喜びを表現することです。でもときには、実在しないこれら十人の作者の創作意欲が体にみなぎるように感じました。しかしとりわけ、私が明白にしようとしたことは、どの本も他の本の存在を前提とし、他の本との対照関係において誕生するという事実です (Italo Calvino, *Mondo scritto e mondo non scritto*, Milano, Mondadori, 2019, pp. 125-126)。

また、1983年にニューヨーク大学で行われた講演の報告テキスト (*Mondo scritto e mondo non scritto*) ではこう述べていた。

私が書いてきた本と、現在構想中の本の大半は、こんな本を書くのは私にはむりそうだなと考えることから生まれると言ってさしつかえないでしょう。ある種の本が私の気質と技量の可能性の限度を超えていると確信したとき、私は机に座り、そのような本を書き始めるのです。

まさに、私の小説『冬の夜にひとりの旅人が』がそうでした。私は今後けっして書くことがないであろうあらゆる種類の小説を想像することから始めました。それからそれらの小説を書こうと試み、架空の異なる小説家十人の創造意欲を私自身の内部に呼び出そうとしました (*Ibid.*, p. 113)。

『冬の夜ひとりの旅人が』は、いわば、カルヴィーノが作り上げた複数の作者によって書かれた小説なのである。このようなカルヴィーノの試みは、異名 (eteronomo) を使い分けて詩を書いたポルトガルの詩人フェルナンド・ペソアの詩法にも

通じるものがあるかもしれない。ペソアが創造した異名たちは、ペソア自身と異なるだけではなく、それぞれが異なる人格と文体をもつ詩人たちで、その数は七十人にも及ぶという (『ペソア詩集』澤田直編訳、思潮社、2008年、p. 142)。

カルヴィーノがこの小説によって企てたことはまた、作者自身の非個人化であり、作者の存在を作品のなかに消滅させる試みであるともいえよう。それは、本を書くという一見すぐれて能動的な行いが、じつはきわめて受動的であるという意識を反映している。したがってカルヴィーノによれば、「作者とは独立して何か書かれるのであって、作者はその何かの道具にすぎない。おそらく本を書いているのは私たちではなく、むしろ本が私たちを書いている」 (*Ibid.*, p. 121) ののである。これと共鳴する文書を『冬の夜にひとりの旅人が』第八章にさがしてみよう。この章は、カルヴィーノの分身とおぼしきサイラス・フラナリーなる作家の日記という体裁をとるが、アイルランド人の著名な作家で、書くことが義務化してから読書の楽しみを失っているという設定のフラナリーもまた、作家の「非個人化」 (spersonalizzazione) (Italo Calvino, *Se una notte d'inverno un viaggiatore*, cit., p. 191) に到達することに心を砕いているらしいことが、以下の二カ所の引用からうかがえる。

私がいなければ、どんなにうまく書けるだろう！ 白い紙と、形を帯びては誰も書かないうちに消えてゆく言葉と物語の沸騰とのあいだに、私という人格のあのやっかいな仕切り板 (quello scomodo diaframma) が介在しなければ (*Ibid.*, p. 170) !

では読むという動詞は？ 「今日は雨が降る」 (oggi piove) と言うように、「今日は読む」 (oggi legge) と言えるだろうか？ よく考えてみれば、読むことは書くことよりもはるかに、必然的に個人的な行為である。書くことが作者の限界を超えられるにしても、それはひとりの人によって読まれ、その思考の回路を横断するときのみ意味をもち続けるだろう。書かれているものが、書くことの力、個人を超える何かに基づく力を帯びることを証明するのは、ある特定

の個人によって読まれうるという事実だけである。宇宙は自らを表現するだろう、誰かが次のように言えるかぎり。「我は読む、ゆえにそれは書く」と(*Ibid.*, p. 175)。

カルヴィーノ著作集の編者、マリオ・バレンギがこの一節を踏まえて評したように、「書く行為の非個人化は、読者の役割の個人化によって補われる」(Mario Barenghi, Italo Calvino, *le linee e i margini*, Bologna, il Mulino, 2007, p. 162)のである。

1960年代後半にロラン・バルトが「作者の死」を提唱したことがおそらくひとつの契機となって、文学批評の考察の対象が、作者から読者へと大きくシフトしたと考えられる。『冬の夜ひとりの旅人が』は、奇しくも同じ年に出版されたウンベルト・エーコの読者論『物語のなかの読者』(*Lector in fabula*, Milano, 1979)とともに、このような批評の流れに沿った作品であることはたしかだろう。エーコによれば、両作が同じ年に出版されたのはまったくの偶然であり、ふたりの作者はともにお互いが何をしているか知らなかったという(Umberto Eco, *Sei passeggiate nei boschi narrativi*, Milano, Bompiani, 1994, p. 2)。

『冬の夜ひとりの旅人が』の男性読者は、やがてルドミツラという名の女性読者に会い、恋が芽生える。わずか数行だけの最終章では、夫婦となったふたりが、大きなダブルベッドで別々の本を読んでいる。小説の結末を引用しよう。

ルドミツラは自分の本を閉じ、自分の側の明かりを消し、頭を枕に投げて言う。「あなたも明かりを消して。読むことに疲れないの？」

するとあなたは言う。「あともうちょっと。イタロ・カルヴィーノの『冬の夜にひとりの旅人が』を読み終えるところなんだ」(p. 260)。

同衾する夫婦であってもそれぞれ見る夢が異なるように、ふたりが寝る前に読む本が異なっていたとしてもなんのふしぎもない。この結末の伏線とも考えられる一節において、カルヴィーノは周到にも、「読書は孤独である。ルドミツラがあな

たには、貝殻のなかの牡蠣のように開いた本の二枚の殻によって守られているように見える。(中略)本はふたりでいるときも、ひとりで読むものである」(p. 146)と書いていた。

このくだりと結末を読んで私がまっさきに思い出したのは(カルヴィーノの念頭にあったかどうかはわからないが)、愛欲の罪を犯してともに地獄に落ちた、パオロとフランチェスカのことである(『地獄篇』第5歌)。義理の姉弟だったふたりが一線を越えて口づけを交わしたのは、ふたりが同時に読んでいた一冊の本が原因だった。恋の仲立ちをしたのは本であり、その作者だったのである。愛する者どうしが同じ本を同時に読むことは、およそ想像しうるかぎり最も甘美な読書かもしれない。とりわけ本の主人公たちが、ふたりの読者とまったく同じ境遇にあれば。しかしそれは、破局へと向かいかねない危険な行為でもある。すぐれて個人的な経験である読書とは、愛するものどうしでもむやみに立ち入ることのできない独自の聖域であるはずだから。読者は誰も、自らの本のあいだにきわめて親密な個人的な関係を結ぶ。読書の時間は、身体の一時的な束縛であり、登場人物たちへの部分的な従属であるがまた、自己という牢獄からの全面的な解放でもある。ふたりが同時に同じ本を読むとは、自らの自由すべてを相手に譲り渡し、自らの夢や欲望まで相手のそれに同一化させることに等しいといえるのかもしれない。「本はふたりでいるときも、ひとりで読むものである」。あなたはどうお考えでしょうか？

(上智大学准教授)

---

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: centro@italiakaikan.jp  
URL: <http://italiakaikan.jp/>